



Title	働く場所で暮らすのか，暮らす場所で働くのか
Author(s)	斎藤, 歩; SAITO, Ayumu
Description	講演
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 12, 7-12
Issue Date	2023-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89047
Type	departmental bulletin paper
File Information	REBN_12_007.pdf



<講 演>

働く場所で暮らすのか、暮らす場所で働くのか

斎藤 歩
劇作家・演出家・俳優

ご紹介にあずかりました斎藤です。よろしく
お願いします。

多分私がここで話すべきことは、この後、皆
さんとトークをする材料になるようなことがお
話しできればいいのかなと思っています。問題
提起とまでは言わないですけども、私が今な
ぜここにいる、こういう仕事をして、ここで
しゃべったりしているのかというところに至る
経緯のようなものを分かっていたかと、一つ
の材料になるのかなど。それをネタに、また後
で皆さんが、それがいいだの悪いだの、卑怯だ
のと言っていたかと思っております。

私は、ご紹介いただいたように俳優という仕
事を一応主にしております。ただ、劇作家とい
う面も併せ持っていたり、演出家という面も併
せ持っていたり、2016年からは札幌に住み、
北海道演劇財団という公益財団法人の芸術監督
という役職だったり、あと、専務理事だったの
が、去年おとしぐらいからは公益財団法人の
理事長という仕事もさせられています。そうす
ると、ある意味、公益法人の経営者、一番の責
任者ですから毎月職員に給料を払っているわけ
で、そういうことも仕事としていますが、何
でこういうことになったのかということをおし
の理解でまとめてみましたので、お話しさせ
ていただきたいと思います。

私のプロフィールに簡単に書きましたが¹⁾、

釧路生まれです。桜木さんと同じです。その後
は、多分「北大演劇研究会を経て」と書いてあ
ると思うのですが、すごく大ざっぱなプロ
フィールなのです。北大演劇研究会を経て俳優
になるみたいなことしか書いていません。

北海道大学に演劇科なんてないのです。演劇
をやりて北大に入ったわけではありません。一
応、私はこの大学に学生として3年半ぐらいい
たのです。私は昭和58年入学ですから、同世
代の方は分かると思うのですが、当時は、入っ
たらまず全員教養部に入られます。私は、理
系の理Iという分類のところに入りました。1学
年2,500人ぐらいいたのじゃないでしょうか。
文系から理系、医学部、歯学部合わせて四十何
クラスありました。そのうちの、たしか二十何
組だった気がします。

理Iというグループで受験をし、そこに入
ると、北18条に教養部というところがあり、そ
こに1年半いて（今はどうなっているか分か
りませんが）、当時の北大はそこでまた選抜が
あるのです。例えば、当時だと電子工学に行き
たい学生が多かったです。人気でした。コン

設立。1996年、北海道演劇財団設立に伴いTPS
契約アーティストに就任。2000年より（株）
ノックアウト所属俳優として、東京での俳優・
演出家の仕事を開始する一方、札幌でも2001年
からTPSチーフディレクター。2016年4月よ
り、札幌に移住し、北海道演劇財団の専務理事・
芸術監督に就任。2020年7月より、理事長・芸
術監督。2022年7月より、理事長。札幌を拠点
にした演劇創造、東京を拠点にした映画、テレ
ビ、舞台出演など活動

1) 公益財団法人 北海道演劇財団 理事長。1964年、
釧路市生まれ。北大演劇研究会を経て、1987年
に札幌ロマンチカシアター鮎转（ほうぼう）舎

コンピューターとかがこれからどっと出るぞという時代で、ワープロなんか誰も持っていない時代でした。ですから、すごく将来性を感じている理系の学生たちはそこに入りたくて、1年半教養部にいる間いい点を取らなきゃいけないのです。いい点を取ると希望のところに進めるのです。

ところが、私は全くそういうジャンルに興味がなく、なぜ理Iに入ったかという、理学部に行きたかったのです。理学部に地質・鉱物学科というすごい地味な学科がありまして、そこで私は山に登って岩を削ったりしながら、この山は6億年前は海底にあったのに、何で今この2,000メートルのところにあるのだろうと考えるようなことをやりたくて北大に来たのです。自然科学を研究する人になりたかったのです。そういう地味なところに行きたい人は少ないものですから、点数が低くても行けたはずなのです。

ところが、その点数どころか、私は大学に入ってから演劇なんていうことを始めてしまって、北大演劇研究会なんていうところに入ってしまって、どんな学生よりも大学に来ているのですが、教室にはほとんど入ったことがないのです。教養部にS棟という建物が今もありますが、その前にテントを張って年2回ぐらい公演をされていて、だからテントにはいるのですが教室には入ったことがない。当然、必修科目も取れていないので、3年半すると学部に移行するための単位がそもそも足りません。そうすると、テントを張っていたら事務職員に背中をトントンとたたかれ、あれは確か9月30日でした。斎藤君、今日付で一身上の理由で退学しますと書けば、君は北大中退になるよ。書かなかったらどうなるのですかと言ったら、10月1日付で学籍処分、放校と言われました。放校って何ですかと聞いたら、北大に入ったという事実がなくなるよと言われたのです。それでもいいと言ったら、いやー、社会に出た後、北大中退と言ったほうが君、何かと便利だと思う

よと言われました。私はまあいいやと思って、退学届を出さなかったのですけれど、一緒にテントを張っていた1個上の先輩があまりに気の毒だと思って、斎藤歩の名前で退学届を出してくれたのです。ですから、私は履歴書上は北大中退ということになっているのです。その人は戸塚先生という方で、今、厚別高校で演劇部の顧問をやっています。

それで私は一応北大中退ということになっていますが、大学時代はほとんど演劇しかしていません。それで、多分、演劇を続けていきたいなと思って大学を辞めたのです。ただ、北海道で演劇を続けていける可能性というのは当時ほとんどありませんでした。40年ぐらい前です。北海道で演劇で食えるなんていう道がほとんどないような時代でしたので、先輩たちは皆東京へ行きました。私も東京の先輩に誘われて、とある劇団の稽古場に行きましたが、何か、違うなど。

というのが、私は釧路生まれなのですが、釧路のことを一つも覚えていないのです。先週、北海道新聞（釧路支社）の人から取材がありまして「釧路×人」というコラムを連載しているらしくて、カメラも来て、斎藤さん、釧路の思い出を一つ言ってくださいと言われ、ごめんなさい、私ね、生まれて半年もしないで釧路を離れているので何一つ覚えていないのです。それで、釧路のことをいろいろ聞かれたのですけれど、それは全部大人になって以降の記憶で、あの新聞記事はどうなるのかなと今心配しているのですけれども、ほんとに釧路で生まれただけで、気がついたら札幌で生きていて、しかも札幌オリンピックの前、万博の頃には大阪に移っている、札幌の記憶もあまりないのです。ただ、親から、あんたは道産子なんだよということを何かすり込まれて、ずーっと育てきました。

小学校に入学する頃は大阪でした。小学校を卒業したのが千葉で、親の仕事の関係で千葉県の中でも三つぐらい転校しているのです。です

から、私は一つの土地にちゃんと根差して人間関係を築いたことがないのです。だから、幼なじみがいないのです。転校するたびにいろんなところへ行行って、例えば、こいつ幼稚園のときおしっこ漏らしたんだぜっていう記憶が私の中にはないのです。ですから、常によそ者だったのです。

中学も二つ行っています。高校は千葉県立佐倉高校で、最初から入って、卒業することができました。それまではずっと親の都合で転校を繰り返してきて、ただ、あんたは道産子なんだよということだけすり込まれて、それで、佐倉高校を卒業するときに初めて自分で自分の住む場所を選ぶことになり、そのときに北大（札幌に住むこと）を選んだのです。多分それは、親からそれだけすり込まれたということもあるのでしょうし、どうせなら北海道で根を下ろしたいなと思ったのです。自分のアイデンティティみたいなものが欲しかったのかもしれませんが、ただ親から離れたかっただけなのかもしれないです。けれども、初めて自分で選んだ土地が北海道で、この大学へ入って、3年で追い出されて、じゃあどうする、東京へ行行って、続けて俳優の仕事をするのか。でも何か違うなと思って、食えもしないけど札幌で劇団をつくり、そこで活動しました。

そのうちに、1996年に今私が理事長をやっている北海道演劇財団ができたのですが、それまで10年ぐらい、とにかく札幌で演劇をやっていました。当初はアマチュア劇団でしたが、どんどん忙しくなってきた、徐々にちょっと食えるようになってきたのです。私は27歳か28歳のときに突然プロ化宣言をして、食えもしないのに俺はプロだと言ったら、いろんな人がちょっとした仕事をくれるようになったりして、石狩から町民劇で演出してくれないかとか、いろんな派生した仕事があるようになりました。1997年か1998年ぐらいに初めて札幌の連中と作った芝居を持って東京公演に行きました。それを見てくれた東京のとある人が、私を

東京の舞台に呼んでくれたのです。ただし、それは東京の俳優に払うギャラしか出ませんと。東京の滞在費までは出ないのです。でも、やってみたく舞台だったのです。世田谷パブリックシアターのオープニングのかなり大きな芝居で、主演が柄本明さんで、その相手役だったのです。それで、3か月ぐらい札幌を離れました。ギャラとしては厳しいですが、知り合いの家に泊まったりしながら、ある意味投資ですね。そのまま東京で仕事が続くと思っていたのですけれども、その舞台に出続けました。それで、3か月ぐらい東京に暮らしました。そうすると、今度、柄本さんから、あんた、東京で映画の仕事やってみない？と言われたので、まあ都合のいいときであればということになったのです。

今の事務所は柄本さんと同じ事務所ですが、私はその芝居が終わった後、北海道に帰りました。というのは、もう北海道で大分暮らして仕事も得ていましたから。演劇というのは劇場の関係で1年半から2年先まで仕事が決まってしまうものです。2年先まで札幌でやらなければいけない仕事が入っていたのです。そこに今所属している東京の事務所の社長がやってきて、柄本さんから聞いたのだけど、どうだい、うちで仕事してみないか、いくつか仕事があるのだけど、と言われました。札幌のスケジュールがいっぱいなので2年ぐらいできないと思いますよと言ったのです。でもちょっと隙間が空いているところで何本か映画に出てみるよと言われ、初めて映画に2000年頃に出ました。

でも、そのときはまだ札幌に住んでおり3か月ぐらいかかる映画なのですが、直前まで「この日に撮影」です、としか出てこないのです。札幌の仕事も中途半端に引き受けられないし、映画のスケジュールが空いたところでこっちの稽古を埋めていくみたいなことをやりました。ですから、最近、2拠点で生活するなんていう言い方があると思うのですが、2都市の生活みたいなことをそのころやっていました。ひど

いときには1日3回飛行機に乗っていました。夜中まで札幌で稽古をして、朝一番で東京に飛んで、午前中何か仕事をして、でも夕方に札幌で稽古があるので、それに間に合うように帰ってきて、最終便ぎりぎりまでこっちで稽古をして、最終便で東京に戻って、翌日の朝一のロケに間に合うということをやっていました。週3往復とか当たり前でした。30代、40代の頃は、ちょっとそれが楽しかったのです。

そうしているうちに、2002年ぐらいから東京の映画とかドラマの仕事が忙しくなってしまうと、やっぱり俳優という仕事は札幌でいろいろ抱えながらやれる仕事じゃないのです。現場にスケジュールを丸ごと渡さなければなかなかスケジュールが切れないものですから、結局、札幌で借りていた家を引き払って東京に住み始めたのが、確か2001年頃かな。それからは東京がメインになって、年に数か月札幌に芝居を作りに来るといった感じの仕事になりました。ですから、結局2000年ぐらいから2016年までは東京に住民票も置いていました。そのときに感じていたことは、往復生活も最初は結構面白がっていたのですが、そのうち疲れてくるのです。朝起きたとき、どっちにいるのかほんとに分からないというタイミングもありましたし、あと、ミスも出始めるのですね。ちょっと起きられないとか、何とか片づけて、徹夜のような状態で朝一の現場にどーんと行っても俳優としては準備不足。ちょっと迷惑をかけるという現場が一つ二つあったときに、これはまずいなと思いました。若い頃はできたのですが、40歳を超えたときに、もうこういう無茶はできないのかなと思いました。ただ、収入を得ているのが東京での撮影や舞台だったものですから、東京での生活を選ばざるを得なかったのです。

私は千葉で高校を卒業した後、北海道に引越してきて、自分で北海道に住もうと決めた時の感覚というのがずっと残っていて、東京に住んでいるのが何か嫌だったのです。どこに行っても混んでいますし、札幌に戻ってくるたび

に、何て暮らしやすいのだろうと思いました。稽古場に通うのも札幌なら10分、15分で歩いて行けるような距離に暮らしているのに、東京だと稽古場に通うのに片道1時間半かかったりするのは。往復で3時間。そういうことがあったり、どこの撮影現場に行くにももの凄い渋滞を抜けていくことを前提にしなきゃいけない。どこに行くにも混んでいるし。あと、水がおいしくないのです。北海道には札幌以外にも水のおいしいところがたくさんありますが、私には札幌の水が合っているなど学生時代から思っていました。

それで、東京に十何年も住んでいて、60歳を過ぎたら帰ってきてこっちで仕事をしようなんていうことを考えていましたら、ちょうど2016年に、ちょっとこっちに来てくれと言う話が起きました。北海道演劇財団を立て直したいという人たちがうちの事務所をいらして、うちの社長とマネージャーに頭を下げて、斎藤を北海道にくれと言って、頭を下げてくれたのです。それで、こっちに帰ってこられました。

東京を捨てて、札幌に引越すなんていうことはこれはもう、みんなびっくりしましたね。でも私にとってはすごくすんなりと、それならば札幌で働くのは多分いいし、私を呼んでくれて、私が働く場所をこうやって用意してくれるのならと思います2016年にこっちに帰ってきました。

それからはこっちベースで、東京の仕事もやっています。来週も東京に行って、撮影があるとか。ただ、向こうの仕事のペースはもの凄く減りました。そのぐらいこっちの仕事がすごく忙しいです。演劇って、こんなに仕事をさせられるのだと。演劇なんかで食えるのかなと40年前は思っていたのですけれど、こんなに仕事があるのだという状況に今なっていて、私一人ではもう抱え切れないので、今年の春からは私より10歳若い世代に芸術監督を譲りました。今、彼は一生懸命来年以降のスケジュール

を立てているところです。

それで、今こういうことを（パンフレット）やっていますので²⁾、もしよかったら是非参加してください。幾つかもう終わった事業もありますが、演劇・俳優といいながら、札幌交響楽団と一緒に最近では仕事をすることがあったり、右下に「ライブアートツアー in 栗山」とあると思うのですが、これは文化庁から頼まれてやっていることなのですけれども、これ実は3年前、第1回は北大から始めました³⁾。そこにいらっしゃるTさんに最初相談して、北大でこういうことをやりたいのですが誰に相談したらいいでしょう、と言ったら、北大の広報のKさんという方を紹介して下さって、観光客を連れてあちこち案内するのですが、それを俳優が歴史上の偉人になって登場するという企画を考えて、それを収録するというをやったのです。今年それを栗山でやりました。

これはかなり評判がよくて、続けているものなのですが、北大の2020ツアーは私がクラーク博士の役になって、ツアーの進行役の人と観光客がクラーク像前から「さあ行きましょう」と言うと、北から馬がやってくるのです。その馬に乗っているのが私なのです。馬に乗って、「ビー・アンビシャス」とか言って、「どうも、クラーク博士です」と。クラークさんはどんな研究していたのですかと聞かれて、「うーん、詳しいことは博物館で見てください、もう昔のことなので忘れた」と。そのぐらいいいかげんな芝居なのですが、ほんとうに北大には冗談で言ったのです、「馬を貸してくれない？」と。私がいた頃は馬術部の馬場がすぐそこにあっただけだったので、馬がメンストを歩いていて、その辺馬糞だらけだったのです。それで、馬を貸してくれないと言ったら簡単に貸してくれると思った

ら、今北二十四条に馬場が移って、なかなか難しいと言われ、困ったな、最初馬で登場したいんだと言ったら、その広報の方が施設の方と話し合ってくれて、何とかそのシーンが実現できました。北大はすばらしいですね。こんな中退になった私が今大学の教壇でしゃべっているとか、おもしろいですね。(笑)

そういうことをやって、北海道の地域の物語というのはそれぞれ点であります、私ら演劇人、劇作家というのは、その点と点を結びつけて一つの物語にして提供する。それまで点だったもの、あちこちにあるいい素材など、それらをつなげて物語として提供することによって違った側面からいろいろなものを見ることができるようになってきているのではないかと思います。

北大でこの企画を最初にやらせてもらい、去年は増毛でやって、今年栗山でやりました。今年も12月ぐらいからインターネットで一般に無料で公開できると思いますので、もしよかったら見てください。

そういうことで、私は仕事のあるところに行って暮らしました。ただ、自分の気に入ったところで働きたいというわがままが、あるときから急に言えるようになったから帰ってきたというよりは、求められるところに行ったという感じなのです。求められるところに呼んでもらえるように仕事をしていたつもりはないですけど、やっぱり北海道で暮らしたいなということはずっと割と強く思っていたから今ここに仕事があるのではないかと考えています。こういう今の状況というのは分析する人によっては全然違う見え方をすると思うのですが、自分では、仕事がなかったら帰ってきていなかったですかね。

仕事を用意してくれる人がいて、今、自分の暮らしたいところに暮らせているというふうに感じています。でも、東京で働いているのはほんとに嫌でしたが、その時間があったからこそ今ここでの仕事があるのかもしれないとも

2) JAPAN LIVE YELL project in HOKKAIDO (2022) <https://s-e-season.com/jlyp2022/>

3) 同上 (2020) <https://s-e-season.com/SBLAC/program/lat/>

思っています。仕事の内容によってはあっちに行かないとできない仕事があって、それはやっぱりあっちに一回出ていかないといけなかったのではないかというふうに思っています。

今は、そういった経験をこの地で生かして仕事をさせてもらっているという状況です。

以上です。(拍手)